



短大から四年制へ

日本福祉大学名誉教授

浦 辺 史

社会事業短大を大学に昇格させることは社会事業教育の上から必要とされていた。短大教育では、いまだ人格が成熟していないため専門教育に期間を要するとか、教育が中途半端で困難なケースは扱えないなど。そのため短大時代には一年の専攻科を設けたものの、これも中途半端で学生は明治学院や関西学院等に編入するものが多く、短大生の大学昇格の要望は切実であった。何よりも短大卒は社会福祉主事等の専門職につくため公務員試験を受ける場合不利であった。三社大連絡協議会においては社会事業短大の昇格問題がいつもとり上げられた。鈴木学長も大学・短大・高校・中学・幼稚園を擁する学園構想をもらされ、大学づくりを日程にのぼせ、すでに三十一年版学生募集案内には「わが国唯一の四年制大学の新発足」を公表された。

教授会では三十年の秋東大教授の林恵海（当時大学設置審委員）氏をよんで大学づくりの助言を求め、翌三十一年のはじめ教務委員会は他大学の社会事業学科のカリキュラムをあつめ、四月には四年制大学設置委員会を発足させ、五月には文部省の村越事務官を招いて助言をうけ、将来の総合大学構想として、社会学部、体育学部、法政学部の三学部を考え、当面社会学部の中に社会福祉、応用心理、社会学、児童家庭の四科を構想していたが、八月の申請には社会福祉学部社会福祉学科一、二部となり、併せて教職課程をおき、新大学を鈴木修学学長は日本福祉大学と命名した。

学部になって短大からの編入学生も多く、三十二年度の二百十九名から三十四年度三百八十名、三十六年度六百八十九名と次第に増加、授業料も三十二年の三万八千円、三十四年三万九千五百円、三十六年五万八千円と次第に増加した。当時の教授会は、学生数増加と授業料値上げに反対ではあったが、大学経費の過半が法音寺負担という不正常的な実態から、禍を転じて福となさんと、増加する学生に対し教育水準低下を防止するため、社会福祉学科そのもののカリキュラムの検討とその改造にとりくんだのであった。これまでのわが国の社会福祉学科はアメリカ直輸入の社会臨牀中心のカリキュラムで多人数教育に適合しないばかりか、社会福祉の政策論的研究が稀薄であった点を是正したもので全国的に注目するところとなった。